

---

# DANCING QUEEN

y t

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DANCING QUEEN

### 【Nコード】

N2398P

### 【作者名】

yt

### 【あらすじ】

バラムガーデンで抜群のリーダーシップとカリスマ性を発揮する、女子生徒シュウ。また、カードゲームの猛者として、トップクラスの地位を築いてもいるのは周知の事実だ。しかし、スコール・レオンハートとの関わりについて知っている者は、あまりにも少ない。これは、シュウとスコールの知られざる関係を描いた作品……かも  
しれません（笑）

「みんなお疲れさま！ 今日これで仕事終わりだからあ、疲れちやっただ人は帰って寝てもイイよ！」

バラムガーデン所有、高速上陸艇。

トラビアでの魔物の駆逐作戦に駆り出されたSeedたちが帰途に就く。

六隻の艇のひとつで、リーダーの元気な声が響いた。  
他の五人は死人の如き眼でもって彼女を睨む。

「……ルブルムドラゴンが出るなんて聞いてないんだけど」

「えっ！？ やっただあキステイスちゃん！ 言ったじゃないこの前

」

「俺も初耳だったぜ。死ぬかと思った」

「死んでないし！ 全然平気でしょ？ ゼルくん強いモンね」

「あたし一回死んだけど……」

「現実を見て、セルフィは死んでないわ！ 私がアレイズで生き返らせたもん」

「情けねえ、俺は結構余裕」

「サイファー、ガンブレード振り回しすぎだから今度から違う班ね  
x」

全員押し黙った。勝てる気がしないからだ。

「プッ、やっとSeedになれたのに災難だなサイファー！」

「何だこのチキン野郎!!」

ゼル「デインとサイファー」アルマシーは、自他共に認める犬猿の仲。

「早く帰ってシャワー浴びたいわ」

「あたしも〜! もうクタクタだよお!」

キステイス「トウリップが美しい金色の髪を掻き上げた。その脇ではセルフイ「テイルミットが膝を抱えている。」

「なあに? みんなツレないなあ〜!!」

今回の班長、シユウの朗らかな声が、高速艇内に響いた。

## DANCING QUEEN

「しっかしさあ、シユウ先輩作戦のときと今とじゃ人格違うよな」

ゼルが囁いた隣には、額にまだ少しだけ傷の残った少年が鎮座し

ていた。

先ほどから全く口を開こうとしないスコール「レオンハートは、ちらりとゼルの方を見ただけで、応答しようとはしなかった。

「んだよ愛想わりいな！ そんなに帰りたいのか？」

「リノアが待つてるもんねえ」

「おーおー、お熱いですねスコール君！」

セルフイとキステイスが冷やかす。スコールは無表情のままだった。

「イイよなあ。初恋の人と恋人同士になれるなんて、理想じゃねえか」

ゼルが遠くを見つめながら言った。

「はあ！？」

突然、サイファーが素っ頓狂な声を上げる。

そしてスコールとゼルを交互に見て、げらげらと笑い出した。

「はっはっはア！！ そりゃそーか！！ んな訳ねえかア！！」

「な、何だよサイファー、いきなり……」

「キモ〜い！」

「どうしたのよサイファー？」

シュウが尋ねた。

「あ？ いや、ちよつとな。へえ、アンタもナカナカナあ……」

今度はシユウを侮るように言う。だが彼女は表情を崩さなかった。

「何よ？ どうしたの？」

キステイスがたまりかねて尋ねた。

だがサイファーは結局、何も話すことはせずに笑っていた。  
スコールをちらちらと盗み見では。

x x x

バラムの港では、既にいつもの青い衣装に身を包んだリノアが待っていた。

最後の最後まで、スコールは口を開かなかった。

不審には思ったが、ゼルたちは尋常ならざる彼の態度に質問を躊躇していたのだ。

「おハロー！」

「もう昼だ」

第一声がこれだった。

「せ、せっかくだから打ち上げしよっか！！」

「おおッ！ いいね！！」

「さんせー！！」

キステイスの提案に、ゼルとセルフィが賛同する。

「リノアも一緒にどう？」

「あ、いいの！？」

「いいわよ。多い方が楽しいし」

「やったあ！ 行こ！ スコール！」

スコールの方を向き、眼を輝かせるリノア。

「私は遠慮しとく。戻って学園長に報告しなきゃなんないし」

シユウはそう言い、ガーデンへと向かった。

「俺も、帰る。今日は疲れた」

「ええ〜！ つまんなあ〜い〜！」

リノアが膨れる。

「任務ばかりでそんなしかめっ面してると、そのうち笑えなくなるよ！」

「悪かったな」

そう言つとスコールは踵を返し、バラムの港の階段を登っていった。

「も〜、付き合い悪いんだから〜！」

「でも変わったわよ。スコールは」

キステイスが呟く。

「なんて言うか、あんなにスコールの内面に踏み込めるのリノアだけだよな」

ゼルも相槌を打つ。

「えゝ、そお？ 照れるなあゝ」  
「くく」

後ろ側で含み笑いが聞こえ、リノアは振り向く。  
そこにはサイファーが意味ありげな表情でリノアたちを見ていた。

「あ、サイファーいたの？」

「余計なお世話だ。しかし、おめでたい連中だぜ」  
「はあ？」

「スコールから何にも聞いてねえらしいな」

「んだよてめーは。言いたいことあるんならハッキリ言えや！」

ゼルの語気が自然と強まる。

「それは構わねえが、リノアの前じゃなあ」

「え？ 私？」

「さっ、リノアはちょっと向こう行ってー！」

セルフイに押され、強制退場を喰らうリノア。

「オラ、期待通りリノアは聞いてねえぞ」

「チキン野郎、お前態度でけえな」

「ッー！！」

「ぜ、ゼル！ 抑えて抑えて！ サイファー、話してちょうだい！」  
「仕方ねえな」

サイファーは勿体ぶるように、一言一言噛み締めるように始めた。

「アイツの初恋はな」



×××

「よく、平気だな」

バラムガーデン。

探し回ってやっと中庭で見つけたその人に、スコールは声を掛けた。  
た。

手にした書類から眼を離すことなく、その人は答えた。

「ん〜？」

「何にも感じないのか？」

「べつにイ？ 慣れてるし」

スコールは少し疼く心の中の何かに気付いた。

「気にして欲しかった？」

その天真爛漫な表情でスコールを見る。

「馬鹿言つな」

「スコールは気にしたんだ？」

「……当たり前だろ」

その人はクスクスと笑った。

そう言えば、初めて出会ったのもここだった。

その人……シユウは悪戯っぽく微笑み、スコールを見た。

×××

『コラーー！！ もう始業ベルは鳴ってるぞお！』

ベンチでまどろんでいた少年は、その大きな声のお陰で憂鬱な現実  
実に引き戻された。

片眼を開けてみると、黒髪の、いかにも活発そうな女生徒がいた。

『……………』

『早く行かないと、教官にボコられるよ！』

(面倒くさい)

『あなたには、関係ないだろ』

大抵、この台詞で自分に集ってくる連中は距離を置いた。

『はあ！？ ちょっと、何なのあなた！！！』

帰ってくる反応が、いつもと違った。

『新人生ね！？ 私のこと知らない生徒なんているはずないわ！』

(何だ？ この女)

『なによ〜！ その眼は！ 生意気だぞお！？』

『くおつるあ〜〜〜！！ お前ら〜〜！！』

轟音が中庭の静寂を吹き消し、その女生徒はびくりと身体を震わ  
せた。

『とつくに授業は始まつとるぞオツ！！』

『やっばー！！ ほら！ 逃げるわよー！！』

『お、おい』

『どこのクラスだお前ら〜〜！！』

教師の遠吠えを背に、ふたりは走り続けた。

『私、シユウ!』

『え?』

『名前! シユウっていうの!』

『……スコール』

『はあ?!』

『スコール=レオンハート』

これが、最初。

x x x

『あんたさあ、Seed狙ってるの?』

息を弾ませながらシユウは尋ねた。スコールは、ここに訪れるのが初めてらしく、キョロキョロと辺りを見回している。

訓練施設の奥にこんな空間があったとは、知らなかった。

何故だが、この場所はとても落ち着くような気がした。

『ねえつてば!』

『別に、あんま興味ない』

『バラム入ってSeedに興味ない!? 変なヤツ!』

『関係ないだろ』

『私になるよ。絶対合格してやるんだ!』

『ふうん』

シユウは面白くなさそうに頬を膨らませた。

『あんだ、そんなしかめっ面ばかりしてると疲れない？』

『生まれつきだ』

『趣味とかないの？』

『ない』

重症の患者だと、シュウは思った。

しかし次の瞬間には、何かに気付いたように眼を輝かせる。

『そ〜だ！ イイものあげる！』

「ごそごと持っていた鞆をあさる。何事かと眼を細めるスコール。

『じゃ〜ん！！ 今全世界で大流行のカードゲームの基本セットを今なら無料贈呈！ こんなお得な話はないよ〜！！』

『下らない』

スコールは眼もくれず、踵を返した。これ以上付き合っていられない。

『逃げるのお？』

スコールの脚が停まった。

『ライオンハートの名前が泣くぞお？』

『……レオンハートだ』

『じゃあさ、私と勝負してあんだが勝ったらもうあんだにちよっかい出さないから！』

『絶対だな』

『モツチロン！』

スコールは半ば無理矢理シュウの手からカードをむしり取った。  
そして真正面に向かい合う。

『ルール知ってる？』

『馬鹿にするな。Triple Triadのルールくらい知ってる』

意気込んだスコール。一枚目を、右上隅に置いた。

x x x

『……卑怯だ』

『いえ〜い！ 私の勝ちイ』

スコールは自軍カードが一枚もなくなったフィールドを見つめた。

『汚いぞ！』

『なによ！ 何が汚いつての！？』

『カードが強すぎる！』

『私の実力を馬鹿にする気！？』

『実力じゃないだろ！！』

『へへ〜ん、何とでも言えばあ？』

『ぐっ』

『あ、それとそのカードあげる。それ余ってたんだあ』

シュウは立ち上がると、スカートの裾を払った。

『弱すぎて話になんなあ！ ちよっかい出す価値もないわあ！』

『……』

『あ〜あ、時間無駄にしちゃった。あ、もうちよっかい出さないわ。』

安心して。それじゃね。ス・コ・お・ルくん 』

スコールに背を向け、立ち去るシユウ。

その背を燃えるような眼で見つめる少年が、そこにいた。

おい、聞いたか

スコールだろ？ 学園中のプレイヤーに対戦申し込んでるんだってな

あの暗い男が、いきなりどうしたんだ？

あたしスコールくんがデリングシティでカードやってるとこ見たよ

クラブに勝ったんだって!?

僕のカード全部取られちゃったよ、トホホ

何でも世界中のモンスター、カードにしまくってるんだって!

私この前ボコボコにされちゃった。強いよスコールくん!

何かクイーン直々に鍛えてやってるみたいなこと聞いたぜ？

あゝ！ 知ってる知ってる！！ 放課後毎日やってるよ！！

終わると速攻、先輩の教室行くんだろ？

なんかすっごくいい雰囲気ですゝ、先輩に用があっても近寄れないくらいだよゝ

家でやれ!

『 やっほおう！ エルヴィオレ欲しかったんだあゝ！！ いつもい

つも私のためにカード持ってきてくれてありがとうねえ、スコール  
『 何でだ……… 』

スコールはがっくりと肩を落とすうなだれた。

『どうして勝てない!』

『スコールが弱いからだよ』

新しいカードを手に入れホクホク顔のシュウを睨みながら、スコールは何とか反撃したいと思案を巡らす。

『……カードばかりやってると、彼氏出来ないぜ』

『はあ?』

『カードオタクに彼氏なんて出来ないって!』

『彼氏くらいいるわよ』

『え?』

不思議な音が自分の中でした。

今まで聞いたこともないような音が、確かに胸の中で……。

『……? 嘘よ嘘! 冗談だってば!』

『冗談、か』

スコールは今自分の中で聞こえた音が何なのか、無性に知りたくなかった。

だが判らない。どう確かめたらいいのか、誰に聞いたらいいのか。

×××

『よ』

最近ウザいやつがいた。スコールは邪魔そうに顔を歪める。

『お前、先輩に惚れてるんだって?』

『ウルサイ』

今思えば、どうして否定出来なかったのか。

『へえ〜。無愛想なお前が、いつちよまえに?』  
『消える』

あれから、シユウのところへ行っていない。

彼女の前に立つと、変な感情になる。スコールは嫌だった。

そんな自分を彼女に見られるのも、そんな顔をする自分も。

ああだこうだ考えるうちに、自制が利かなくなるほどの“ぐるぐる”が、自分の頭を駆け巡っていることに気付いた。

とりあえずはカードもやめた。

シユウのことを考えるのもやめた。

前者は出来た。

後者は、出来なかった。

『可哀想にな』

不意に現実に戻され、憐憫を含んだ眼で自分を見るウザいやつ。

スコールは怪訝な表情で、そいつを睨んだ。

『何?』

『先輩、もう男いるもんな』

『?』

『つい最近付き合い始めたんだろ? 同じクラスのヤツと』

『……?』

『は? まさか知らなかったのか?』

わざとらしい意地悪な笑顔が覗いた。



『この前“秘密の場所”でいちゃついているの見たぜ』  
『サイファー！ 風紀委員会議既始！』

眼帯をした風紀委員の女性が声を掛ける。

『おう、今行く！』

サイファーはスコールの肩をポンと叩くと、薄ら笑いを浮かべて立ち去った。

『何話？』

『ああ、ちよつとな』

そんな声を背中に、スコールは歩き出していた。自分の意識とは無関係に。

廊下を曲がる。高学年の教室前の廊下に、シュウはいた。  
女友達と楽しそうにお喋りをしている。スコールは無言で進んだ。

『！』

友達のひとりが、スコールに気付いた。

シュウの裾を引き、合図する。

『あれ？ スコール？』

『話がある』

無然とした態度でそう言うと、スコールは視線を落とした。

『何？』

『ごじや、言えない』

シユウの友人がひそひそと話している。

『え？ 何で？』

不思議そうな顔をするシユウの腕をむんずと掴む。

驚いたように眼を丸くした彼女を有無を言わさず引っ張る。

『ち、ちよっ！！』

スコールは自分で今何をしているのか判っていた。  
しかし、何故こんなことをしているのか判らなかった。

×××

『何よ、こんなとこ連れてきて』

あの、訓練施設の奥にあるスペースまでやって来て、シユウは頬を膨らませた。

普通の人間ならそうだろう。無理矢理連れてこられたのだから。

『あ！ 判った！ 私を襲う気……』

『ホントなのか？』

真正面にシユウを見据え、訊く。

『え？ 何が？』

『付き合ってるって、ホントなのか？』

一瞬の沈黙があつたが、すぐに答えは返ってきた。

『ホントだよ？ どうして？』

『何でだよ』

どンドン頭に血が上ってくる。

『ええ？ 何でって……何で？』

『この間まで、男に興味なんてなさそうな態度だったじゃないか』  
『あるよ？ 私、そっち方面に興味あるように見えた？』

シユウは笑った。スコールは笑えない。

『何でそんなこと訊くの？』

『何でって……』

もうだめだ。

止まらない。

『嫌だからだ』

『はあ？』

『……くっ』

ぶいと後ろを向いたスコール。シユウは首を傾げ、不思議そうに見ていた。

しかし、すぐに判った。

『スコール？ 私のこと、好きなの？』

『ば、馬鹿なこと言うな……！ 誰が……！』

『じゃ、何でそんな赤い顔してるの？』

気が付くとシユウが横から覗き込んで、面白そうに見つめていた。

『こ、これは』

『もしかして、本気で?』

『うるさいっ!!--』

シユウを振り払うと、スコールは黙り込んでしまった

この女は何を言っている?

何を喋っているんだ? 俺が? お前を? 何だつて?

『人間くさい顔するようになったじゃない』

『え?』

『前はそんな顔しなかったよ。生きてない人形みたいな顔。確かに整ってはいるけど、全然生き生きしてなくてつまんないの。スコールは何だか自分から全てを拒絶してるみたい。私には、多分変えること出来ないなあ』

シユウは残念そうに呟いた。

『……俺じゃ、だめって言いたいのか?』

『ん?』

意味深な表情をスコールに寄せ、シユウは悪戯っぽく笑った。

『スコールが今私に持つてる感情、何だかホントに判ってる?』

『は?』

『勘違いかも知れないよ?』

『何が言いたいんだよ』

『わっかんないかなあ』

そう言つとシユウは背伸びをするようにつま先を伸ばした。突然のことで、スコールには何が起こったのか判らない。覚えているのは、柔らかな唇の感触と、シユウの髪の毛の匂い。そして耳元で囁く声。

『もうちょっとオトナになったら、考えてあげてもいいぞ』  
『……』  
『頑張りなさいよ！ 少年！』

そう言つて再びシユウはスコールに唇を絡ませた。  
スコール「レオンハートが覚えているのは、これくらいだ。

x x x

「結局、すぐ別れたんだつてな」  
「まゝねん。最初からあんま好みじゃなかったし」

スコールはベンチに腰掛け、書類の束を膝に抱えるシユウを見た。どれくらいこうしていただろうか。  
行き交う生徒たちがちらちらとふたりを見ては通り過ぎていく。それはそうだろう。

「もう、遅いからな」  
「何が？」

シユウが尋ねた。面と向かつて言われると、スコールも慌ててしまつが、努めて表情には出さない。

「……俺にしとけば良かったつて」

「あはは、それ、イイね！」

ひとつ年上の先輩は、ころころと笑った。

「今って、どうなんだ」

「……何が？」

先ほどとは微妙に異なったニュアンスの問いだと、スコールは思った。

「とぼけるな。男を作る気、ないのか？」

「それって、遠回しに口説いてる？」

「……」

「残念でした。二股かけるような男は好きじゃありませんよ」

「……」

「今はSeedの仕事で忙しいし、それなりに満足した学園生活を

「

「何、焦ってるんだ」

シュウはスコールを見つめた。スコールも見つめ返す。

「一年間、俺がガキのまま成長しなかったと思うか？」

「……なによ」

隣に腰を下ろしていたシュウが、スコール側に身を寄せる。

「私に喧嘩売るつもり？」

「そんなつもりはないさ」

「じゃあ、どういっつもりよ」

スコールの横顔を軽く睨むように、シュウが視線を送る。

「……無駄に、長い時間、あんたとカードゲームやってたわけじゃない」

「？」

「焦ると、よく喋るんだ。あんたは」

「えっ」

「喜んでるときは口に手を当てる。落ち込むとやたらと笑う。疲れていたら無駄に相手を気遣う。興奮してくると、制服のリボンを緩める。他にも」

「ちよ、ちよっと!」

珍しく声を上ずらせ、シュウはスコールの口を塞ごうと身を乗り出した。

「私でさえ気づかないような癖、どうして……」

「悪いか」

しっかりとシュウの目を見据え、スコールはきっぱりと言った。

「あの頃の俺が、あんたのことずっと見てたら、悪いのかよ」

「そ、それは……」

少しずつ、二人の距離が狭まる。お互い、決して目を逸らそうとしない。勝ち負けの問題ではないのに、このとき一組の男女は、視線を外したらいけないような気がしていた。特にシュウは、その気持が強かった。彼女の性格を端的に表現しているようで、スコールは吹き出しそうなのを必死でこらえていた。

「……ねえ」

「何だ？」

「へんなこと、考えてるでしょう」

「さあな」

幸か不幸か、人通りが絶えた。

シュウが更に間を詰める。彼女は自分がスコールの袖を掴んでい  
ることに、気づいていなかった。

「へんなこと考えてるのは、どっちだよ」

「……！ な、生意気！」

「そういう顔が、ずっと見たかった」

そ…  
そういう顔。

今、自分がどういふ表情をしているのか、シュウにはまったく分  
からなかった。耳だけが異様に熱い。喉の奥が、きゅっと詰まった  
ような感じた。息が少し、苦しいかもしれない。でも、悪い気はし  
なかった。彼女は、スコールが大人になったことを悟った。自分を  
客観的に見ることができるようになったから、他人を同じ視点で見  
ることが出来る。ただ、彼の一言が、これほど破壊力を持つものだ  
とは予想できなかった。

「なま……いき」

「知ってるよ。先輩」

？まあ、いいか？。

そんな声が、シュウの頭の中で聞こえた。吐息が交わる。頬の産  
毛が、お互いの熱で撫でられる。

スコールはシュウの眼の大きさに少し驚き、シュウはスコールの  
睫毛の長さに少し驚いた。



俺が変われたのは、リノアのおかげだろう。  
でも、変わるうと思ったのは……。

「いや~~~~っ!! 何やってるのぉっ!!」

絶叫が中庭にこだました。びくりと身体を震わせ、スコールは離れた。

気付かない間に随分と密着してしまっている。  
ずかずかと近付いてくる女性には見覚えがあった。  
その後ろでやつく集団にも。

「い、いいちよ！ これは掲示板に即レスする大スキャンダルやわ  
く！」

セルファイが真つ赤な頬を押さえながら言った。

「ここまで変わっちゃうなんて信じられないわ」

キステイスが溜息混じりに呟いた。

「ち、違う……俺は……！」

「何なのよ！ 何しようとしてたのよ……！」

リノアは半泣きだった。

するとその脇からサイファーがにやにやしながら出てくる。  
スコールは全てを悟った。

「サ、サイファー！ てめえ！」

「いや、済まん済まん！ ついつい話しちまった！」

「さ、私たちは行きましようか」

若き才媛キステイス・トゥリープはさっさと促す。

「ウンウン、いこいこ！」

セルファイも行ってしまった。

「大変だな。お前も……」

ゼルはスコールの肩を叩くと、哀れみを含んだ表情を見せ、やは

りそそくさで行ってしまった。

「はっはっは、イヤ、すまねえなあ!」

サイファーは……微塵も罪悪感など感じてはいまい。

「も~~~~!! スコアルのばか~~~~ツ!!」

リノアは泣き叫んで走って行ってしまった。

「あ」

独り、ポツンと残されたスコール。

弁解の余地はなく、あつと言う間に悪者にされてしまった。

まあ、否定は出来ない。

「行きなさいよ」

隣のシュウが言った。

「あつ! そうだ!! あんたも悪いのに何で俺だけ」

「流されてたことは認めるわ。ほんと一生の不覚」

シュウは少し頬を赤らめて言った。

血の気が引くスコール。しかしながら、一抹の寂寥感がよぎるのはなぜだろう。

「スコールに今必要なのは、お姉さんじゃないでしょ?」

「まだ……子供扱いするのかわ」

「何言ってるの。スコール随分変わったじゃない」

「変わるうと、思ったのは」

「早く行かないと、嫌われちゃうよ」

「シユウ」

「こら！　？先輩？付けなさい！　生意気だぞ！」

昔のように笑うと、シユウはベンチから立ち上がった。

「判ったでしょ？　あの頃私に抱いてた気持ち、何なのか」

「ああ、おかげさまで」

「良く出来ました。これで立派なオトナよ、スコール」

「大人ぶるな。さっきの顔、忘れないぞ」

「も、もう！！　それはいいから、早く行きなさいって！」

憧れていた。

ずっと、その笑顔に。

あの頃の俺には、全然判らなかつたけど……。

リノアに出会って、あの気持ちがなんなのか判った。

今大切なのは、あんたの言うように、リノアなんだろう。

変わったのは……リノアのおかげだ。

でも……でも、変わるうと思ったのは　。

あんたに、好きになって欲しかったから。

随分と俺の心の中で踊っていった、その女王の名前は……。

【終】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2398p/>

---

DANCING QUEEN

2010年12月1日13時35分発行